

---

## 医学フォーラム

---

### <海外留学だより>

## ニューヨーク聴覚留学だより

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 任 書 晃

現在ニューヨーク・アッパーイーストにあり  
ますロックフェラー大学に研究留学しております  
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の任 書晃と申し  
ます。かつては自分も「留学しておられる方も  
沢山いるんだなあ」とお話を読ませて頂いてき  
たのが、いつの間にか書く立場が変わってし  
まっているとは思ってもよかったです。まずは  
街のことからお伝えしたいと思います。

私の留学先の街であるアメリカ第一の都市・  
ニューヨークは、まさに人種の「サラダボール」  
といわれているだけあって、様々な文化や情報  
がまざりあっており、米国内でも「ニューヨ  
ーク」は「国際都市ニューヨーク」であって、  
アメリカではない、という人もいます。実際、  
居住しておりますマンハッタン内には中国系・  
韓国系をはじめ日系のスーパーも充実して  
おり（アジアだけでなく各国のスーパーがあ  
ります）、日本食を作って食べるのにとても  
重要しています。といいますのも、日本食とく

Sushi は高級料理に属してしまうため、日本  
国内では普通レベルの寿司の質の店でもこちら  
では一万円を越えて払わなければならないこと  
がざらです。寿司でなくても日本食は一般に韓  
国料理や中華料理に比べて明らかに高く、高  
いことを理由に食べに行かず一週間も日本食  
なしで生活した後に、本当に元気がなくなった  
ことを今でも思い出します。私自身はアメリ  
カやヨーロッパのフードに特別苦手意識はな  
かったのですが、こういったことを通して、そ  
ういった食べ物も日本国内では実に日本化  
して食べてきたのだということを痛感させられ  
ました。食事では苦勞から始まった一方、逆  
に当初から楽しいこともあり。まず、ニュー  
ヨークでは実に様々な業種の方々と知り合  
う事ができることです。日本にいて年々医  
師や医療関係者の友人としか交流がなくな  
ってきかけていたところでしたが、企業駐  
在、経済・経営学者、芸術家、研究者、現  
地で働く日本人医師、銀行勤務の方など、  
同じ日本人でも知らない分野の方々と交流  
は、広く社会が様々な仕事から成り立って  
いることを改めて実感し、良い意味での価値  
観や労働観の違いを認識できました。

留学先であるロックフェラー大学は、過去  
には野口英世が研究員として在籍したことで  
知られている大学（当時はロックフェラー  
医学研究所）で、現在も建物の玄関には英  
世の銅像があり、Ph.DやMDを問わず代々  
日本人研究者が留学先として継続的に来  
訪しています。大学にはノーベル賞受賞者  
が数名おり、去年亡くなられたあとで受賞  
が決定した医学賞のRalph Steinman  
教授も当大学の教授をされていました。また、



マンハッタンから眺めるブルックリン・ブリッジ



ウッドローン墓地にある野口英世博士の墓

私の研究室の隣には2003年にイオンチャネルの結晶構造でノーベル賞を受賞した Roderick MacKinnon 研があります。普通に構内をあるいていて、学生達と気さくに話し合う姿は、研究者同士の垣根の低いアメリカのサイエンスの雰囲気象徴していると思います。

私が在籍している研究室は Laboratory of Sensory Neuroscience という名の Department で、聴覚のなかでも内耳蝸牛にある「有毛細胞」といわれる受容器細胞に特化して研究をしています。ボスの Jim Hudspeth 先生はまさにその分野の第一人者として知られている方で、米国科学アカデミーのメンバーの一人でもあります。Hudspeth 研では、分子生物学、電気生理学、理論物理学の三分野で研究者が集まっており、それぞれの分野の特徴を活かしつつ、研究室での共同研究も行いながら、さまざまなプロジェクトが進行しています。総勢は15人以上にもなる大所帯で、私はその中の電気生理学の分野で、日本でも時々ペットとして愛されている「チンチラ」を用いて実験を行っています。日本では、それぞれが分野割りて研究室が組まれており、共同研究を行うにも同じ研究室に異分野の研究者がいることは比較的希かと思えます。異分野の研究室との共同研究すらなかなか難しいことなのに、これら違う分野に精通していてもグループをまとめているボスの力量には本当に感嘆させられます。もちろん、人種もさまざま、ボスを含むアメリカ人をはじめ、ウクライ

ナ人、セルビア人、アイルランド人、ドイツ人、スイス人、ロシア人、韓国人、日本人と実に多様です。研究室に来るアジア人は比較的少ないのですが、大学が主催する英会話教室でも、ほとんどがアジア系のメンバーで占められており、やはりヨーロッパ語族とアジア語族の壁が大きいことも実感しました。

この研究室に行き着いた経緯としては、大学院研究で行った仕事がきっかけでした。国内留学として大阪大学医学部薬理学教室に所属し、内耳のリンパ液に存在する蝸牛内高電位 (Endocochlear potential) がどのような機構で形成されているのかを、電気生理学的手法を用いて研究しました。幸いこれらの仕事を論文にすることができ、大学院を卒業後、偶然にも京都で生理学の国際学会にシンポジストとして招かれていた Hudspeth 先生に、ポスドク留学の可否を直接伺える機会を得ました。また、大学院時代に実際にお世話になっていた先生もかつて Hudspeth 研に留学なさっていたことも、留学を後押ししてくれました。

留学当初は、まずとにかくにも英語の通じなさや会話の理解のできなさに落ち込み続けた日々でした。とにかく時間が経つのを待つしかないと思い、友人を集っては、言葉が通じない痛みを分かち合い (アジア系の人々はみな理解し合えました)、ストレス発散も兼ねてひたすら観光をしていました。有名どころとしてメトロポリタン美術館やアメリカ自然史博物館にはよく通いました。この入館料は基本的に Donation となっているので、ケチな私はいつも1ドルだけ (友人と行った時は二人で1ドル!) 払って入っていました。また、近代美術館 (MoMA) は大学と同じロックフェラー家の寄付でまかなわれているため、大学のIDカードがあれば無料で入る事ができました。また、アメリカは年間を通してスポーツイベントがあり、野球にバスケットボール、アイスホッケーにアメリカンフットボールが4大スポーツであることでも知られています。ひょっとすると研究者という特殊な職業故にそういった傾向があるのかもしれませんが、こちらで知るアメリカ人達は、思っ

ていたほどスポーツ全般に興味があるわけではなく、野球に詳しい人はバスケに興味があっても、ホッケー・アメフトなんて全然知らないといったことがありました。さらに自分たちのようにポストクとして来ている人たちはヨーロッパ人が多いので、アメリカなスポーツよりもサッカーが断然人気があり、来た当初に開催された南アフリカワールドカップは、とにかくラボ全体、大学全体が休業モードで、ほとんど皆が誰かの家かスポーツ・バーで酒を飲みながら平日から観戦、という雰囲気です。ほんとうにいいのだろうかと思いつつ昼間からビール三昧だったこともいい思い出の一つです。我々日本人に一番馴染みの深い野球は、名門ニューヨーク・ヤンキースが絶大な人気をほこり、今はかつて広島カープのエースだった黒田博樹投手が在籍しているため、観戦に行く時にはいつも日本人の姿をみかけます。

そんな英語からの「逃亡」ともいうべき遊びをこなしつつ、半年そして一年が過ぎる頃から、次第に一緒に仕事をしていく研究室のメンバーとも、ディスカッションといいますか話し合い？ のようなものができるようになり、自分自身のプロジェクトを持ちながら仕事を進められるようになっていきました。あとで実感したことですが、これも英語が上達した、というよりも周りの皆が僕の分りにくい英語を拾ってくれるようになった、というのが客観的な事実のようです。私の場合は、5年などといった長期の留学はできないことを覚悟していたため、実験系を一から作り出すといった選択はせず、大学院時代に確立した *in vivo* の実験系を、測定機器を変えて応用してみる、ということを試みました。具体的には、音を与えた時に、生きた動物の内耳の中でおこる膜の振動を、ナノメートル単位で膜の振動を検出できるドップラーレーザー干渉計を用いて測定しています。幸い



ヤンキースタジアムにてミッキーマウスと

これまでの成果として、共著論文が Publish されつつ、筆頭著者での論文を現在執筆中です。

とりとめのないお便りで恐縮ですが、最後に、これから留学を考えておられる方に伝えておければと思う事があります。私の場合は幸い周りからの勧めもあって、現在ニューヨークで研究留学をしておりますが、ヨーロッパでの留学の方が良いなあと思っていたときもありました。それは学問的な興味からというよりも、ヨーロッパの方が観光するのに沢山の史跡があることから、という不純な動機からでした。しかし、思惑とは違ってすすんでみた現在の留学には公私ともに、ここまで非常に満足しています。おそらく留学でも何でも、「ナンバーワン」を選択しうるのは難しいことと思われませんが、条件の善し悪しに関係なく、自分にしかない選択（オンリーワン）をするという視点でとらえれば、通常一度限りのチャンスなので、いかなる留学も貴重な人生経験として楽しめるのではないかと思います。

最後に、今もこのような留学の機会を与えてくださっている府立医大耳鼻科医局また大学院で面倒を見て頂いた大阪大学薬理学講座の皆様、この場を借りてお礼を申し上げます。